

33. セルリー

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
BM2	アグロケア水和剤	散布	収穫前日まで	-	
7	アフエットフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫3日前まで	4回以内	
BM2	エコショット	散布	収穫前日まで	-	
24+M1	カスミンボルドー	散布	収穫7日前まで	3回以内	
-	(クロルピクリン) クロピク80 ドロクロール	土壌くん蒸	-	2回以内(但し、 床土は1回以内、 圃場は1回以内)	
	クロールピクリン	土壌くん蒸	-	2回以内(但し、 床土は1回以内、 圃場は1回以内)	
3	スコア顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
31	スターナ水和剤	散布	収穫14日前まで	3回以内	
M5	ダコニール1000	散布	収穫21日前まで	2回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	収穫60日前まで	2回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	バイオキパー水和剤	散布	発病前～発病初期	-	野菜類(かぼちゃ、ズッキーニを除く)
NC	マスタピース水和剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類(だいこん、はくさい、ブロッコリー、キャベツ、レタス、非結球レタス、かぼちゃ、ズッキーニ、しょうが、トマト、ミニトマトを除く)
M1*	ヨネボン水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	

・殺菌剤(参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
NC+M1	ジーファイン水和剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類(なすを除く)

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アクタラ粒剤5	植穴処理	定植時	2回以内	
		土壌混和	鉢上時		
4	アドマイヤーフロアブル	散布	収穫7日前まで	3回以内	
6	アフーム乳剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
4	(ジノテフラン) アルバリン粒剤 スタークル粒剤	植穴土壌混和	定植時	1回	
13	コテツフロアブル	散布	収穫14日前まで	2回以内	
6	コロマイト乳剤	散布	収穫3日前まで	2回以内	
4	ダントツ粒剤	植穴処理土壌混和	定植時	1回	
21	ハチハチフロアブル	散布	収穫30日前まで	2回以内	
4	モスピラン粒剤	植穴土壌混和	定植時	1回	
1	ランネート45DF	散布	収穫30日前まで	2回以内	
14	リーフガード顆粒水和剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	
-	(燐酸第二鉄粒剤) フェラモール、スラゴ、 ナメクジキラーFエース、ナ メトール、ナメクジ退治	株元配置	発生時	-	ナメクジ類等が加害する農作物等

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫7日前まで	2回以内	

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
- 注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
萎 黄 病 (F)	定 植 前	1. クロルピクリン剤で土壌消毒する（土壌消毒の項参照）。 2. クロルピクリン剤処理後、ガス抜きしないで、15日後に直接移植する。方法は、畦上に深さ15～20cm、間隔30cmごとに3mlを注入し、直ちにポリマルチをする（マルチ畦内処理法）。	1. セリ科以外の作物と輪作する。 2. 苗床感染による場合が多いので、病苗を本ばに持ち込まないようにする。
斑 点 病 (F)	は 種 前	1. 種子を温湯消毒する（50℃の温湯に30分間浸漬する）。	1. 温湯種子消毒等の詳細は「萎縮炭疽病」の項を参照する。 2. 苗床では、換気を図る。 3. 育苗期間中の防除を徹底し、罹病苗を本ばに持ち込まない。
	生 育 期 間	1. (育苗期) トップジンM水和剤1,500倍液を散布する。 2. 被害葉を除去する。 3. ヨネポン水和剤500倍液、アグロケア水和剤、ダコニール1000の1,000倍液、アフエットフロアブル、アミスター20フロアブル、エコショット、スコア顆粒水和剤、トリフミン水和剤の2,000倍液のいずれかを散布する。	4. 敷わらを行うと雨滴の跳ね上がりを軽減できる。 5. 定植後は、雨が多いと発生しやすい。 6. QoI剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。 7. エコショット及びアグロケアは生物農薬である（「56. 野菜類の総括注意」参照）。 8. トップジンMは使用時期の制限を考慮し、育苗期の使用にとどめる。 9. スコアは蚕毒に注意する。 10. スコア、トリフミンは同一系統の薬剤である。それぞれの単剤又は同一系統内の薬剤を連用すると、耐性菌を生ずる恐れがあるので避ける。
葉 枯 病 (F)	生 育 期 間	1. 斑点病に準じ、耕種的防除を行う。	1. 発生生態は、斑点病と類似しているため、斑点病の注意事項を参照する。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
萎縮炭疽病 (F)	は 種 前	1. 種子を温湯消毒する (50℃の温湯に 30 分間浸漬する)。	1. 温湯種子消毒法等の詳細は「夏秋作型セルリーの種子伝染性病害 (萎縮炭疽病、斑点病)防除の手引き」を参考にする (https://www.pref.nagano.lg.jp/nogi/sangyo/nogyo/gijutsu/fukyugi/jutsu/201302/documents/1302h14-1.pdf) または「(夏秋作型セルリー)、(手引き)」で検索。
	生 育 期 間	1. ダコニール1000の 1,000 倍液を散布する。	
軟 腐 病 (B)	生 育 期 間	1. カスミンボルドー、バイオキパー水和剤、マスタピース水和剤の 1,000 倍液、スターナ水和剤 2,000 倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. ジーファイン水和剤 1,000 倍液を定植後から予防散布する。	1. 発病してからの防除は効果が劣るので、予防に重点を置く。 2. 多肥、多灌水は発病を助長する。 3. 芽かき後に傷口保護のため、薬剤散布すると良い。 4. ジーファインは高温条件下、連続散布で薬害が発生する恐れがある。 5. バイオキパー、マスタピースは生物農薬である (「56. 野菜類の総括注意」参照)。
アブラムシ類 (モザイク病)	定 植 時	1. ジノテフラン (アルバリン、スタークル) 粒剤、ダントツ粒剤を 1 株当たり 2 g、モスピラン粒剤を 1 株当たり 0.5g のいずれかを植穴土壌混和する。	1. モスピランは薬害の恐れがあるので、使用量を厳守し、根に直接触れないように処理後土壌とよく混和してから定植する。 2. アルバリン、スタークルは蚕毒に特に注意する (特別指導事項参照)。 3. モスピランは蚕毒に特に注意する (特別指導事項参照)。
	生 育 期	1. 育苗及び定植後 1 カ月間は防虫網 (0.8mm 目合い) でトンネルがける。 2. アドマイヤーフロアブル 4,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液を散布する。	
ナモグリバエ	鉢 上 げ 時	1. アクタラ粒剤 5 を 1 株当たり 2 g 土壌混和する。	1. ハチハチは蚕毒及び魚毒に特に注意する (特別指導事項参照)。
	定 植 時	1. アクタラ粒剤 5 を 1 株当たり 2 g 植穴処理し、土壌混和する。	
	生 育 期 間	1. ハチハチフロアブル 2,000 倍液を散布する。	
ヨトウムシ (ヨトウガ)	生 育 期 間	1. ランネート 45DF の 1,000 倍液、アファーム乳剤、コテツフロアブルの 2,000 倍液のいずれかを散布する。	1. いずれの薬剤も老齢幼虫に対して効果が低いので、若齢期から防除を徹底する。 2. アファームは蚕毒及び魚毒に、コテツは魚毒に特に注意する (特別指導事項参照)。 3. コテツは蚕毒に注意する。 4. ランネートは吸入毒性が強いので、散布する時は必ずマスクを着用する他、風向きなどに注意し、噴霧を吸入しない。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
ハダニ類	生育期間	1. コロマイト乳剤2,000倍液を散布する。	1. コロマイトは蚕毒及び魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
ナメクジ類	生育期間	1. リーフガード顆粒水和剤1,500倍液を散布する。 2. 磷酸第二鉄粒剤を1㎡当たり5g、株元に配置する。	1. リーフガードは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照) 2. 磷酸第二鉄粒剤は、日中の高温時の使用をさけ、ナメクジ類が活動を始める夕刻に使用し、作物体上に本剤がかからないように株元に処理する。作物体上に粒が残った場合は払い落とす(異物混入)。 3. 磷酸第二鉄粒剤はスラゴ、ナメトール、フェラモール、ナメクジキラーFエース、ナメクジ退治が農薬登録されている。